

サロン通信：2003年5月号③

2003.5.9. (中塚義実)

第3弾は、4月例会報告です。今号からは、できるだけ添付ファイルで送信しようと思います。長文でかつ添付資料付きですが、ご容赦ください。

なお、5月例会用アンケートは、「24日の出欠に関わらず、5月16日(金)までに全員必ず、笹原氏自宅および中塚宛にアンケートの回答をメールで返信してください」としています。中塚は<BXR02275@nifty.ne.jp>、笹原氏は<thsasa@yhb.att.ne.jp>です。「全返信」でOKです。

《2002年4月例会報告》

【日時・会場】2002年4月18日(金) 19:00~21:20 筑波大学附属高校会議室 →カリンカ~0:00
【参加者(会員)】内田正人(B&D) 浦和俊介((株)フォーレックス) 嶋崎雅規(帝京中学高等学校) 中塚義実(筑波大学附属高校) 中村淳(筑波大学体育研究科) 中村敬(緑サッカークラブコーチ) 本多克己(FCJAPAN) 宮崎雄司(サッカーマニア編集長)

【参加者(未会員)】姜宗真(東京朝鮮中高級学校)
注)参加者は、所属や肩書きを離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

東京都ユースリーグ創設の経緯と実際

中塚義実(筑波大学附属高校/東京都ユースリーグ準備委員長)

これまで何度か報告している「DUOリーグ」の試みは、当初から横にも縦にも広げていくことを、意図していた。すなわち、レベルやニーズの近いもの同士が定期的にゲームを行うリーグシステムを、底辺は近場で、トップレベルは広域で展開する「衛星型サッカー環境」を目指し、「いずれは都内全域に。そして全国へ」とのビジョンを持って広げていったのである。JFAの川淵三郎キャプテンの掲げるミッションにもリーグ戦導入が取り上げられており、高円宮杯の改革と「プリンスリーグ」創設もあり、リーグ構想は追い風に乗っている。

4月12日に、東京都の第2種年代(U-18)の全てのチーム代表者を集めて「ユースリーグ説明会」を開いた。4月例会では、そこまでに至る経緯を振り返り、「東京都ユースリーグ草案(第3案)」をもとに全体像を概観するとともに、想定される課題や解決策について幅広くディスカッションした。

本報告は発表者の中塚がまとめ、参加者の確認を経て公表するものである。ディスカッション①は、発言者名を公表してよい方のみ記名した。またディスカッション②には、4月例会だけでなく、ユースリーグ説明会(4月12日)や、高体連サッカー科学研究会兼ユースリーグ検討委員会(4月25日)で出てきた質問や意見も合わせて掲載し、このテーマに関する動向を網羅する形をとった。

<目次>

- I. DUOリーグから東京都ユースリーグまで-経過報告
- II. 東京都ユースリーグ草案(第3案)について
- III. ディスカッション①(月例会にて)
- IV. ディスカッション②(説明会・検討委員会にて)

I. DUOリーグから東京都ユースリーグまで—経過報告

1996年度の「DUOリーグ」創設から、2003年4月12日の「東京都ユースリーグ説明会」に至るまでの経緯をざっと振り返った。概略は以下のとおり。

<1996年度>

DUOリーグ発足。定期的なゲームの機会とシーズン制（スポーツの生活化）、1クラブから複数チームの参加（補欠ゼロ）、ユース審判の採用（ささえる人材の育成）などに取り組む。

<1997年度>

日本サッカー協会機関誌JF Anewsに「ユース年代のサッカーはいま！」を連載。その中でDUOリーグの活動を全国に紹介した。

<1998年度>

DUOリーグに1・2部制導入。レベルにあった受け皿作り。

<1999年度>

DUOリーグの運営の一部見直し。「東京都ユースリーグ創設へ向けて行動を開始する」ことを決議。

<2000年度>

前期（第9回）リーグよりプログラム作成。6月には「東京都ユースリーグ設立趣意書」を東京都サッカー協会に提出。理事会で都ユースリーグ創設の方向性が確認される。

<2001年度>

東京都高体連の地区（全都で8地区）ごとに「ユースリーグ準備委員（仮称。後に検討委員と改称）」を置く。9月より都内8地区にてプレリーグ開催。

<2002年度>

プレリーグを通年で開催。2003年度前期には、各地区プレリーグの上位チームによる「プレ上位リーグ」を都内全域で開催することを決議。ただし、これらはあくまでも「プレリーグ」であり、公認リーグ創設に当たっては「リセット」する必要があるとされた。

4月より「(財)東京都サッカー協会(TFA)ユースリーグ準備委員会」設置。協会として具体的な準備に取り組む。年度末に「草案」を作成。各方面の理解を得ながら準備を進める。

<2003年度>

2004年度開幕予定の「U-18 東京都リーグ」について、4月12日に暁星高校にて、全ての第2種年代のチームを対象に説明会を開催。4月中に「参加意思確認表」を提出し、それをもとに具体的なリーグ編成を行う。9～12月の「プレ大会」を経て、2004年度から開催。

4～7月までは都内各地区で「プレリーグ」が開催され、同時に都内全域でプレ上位リーグとしての「PJリーグ（8チーム×2ブロック）」開催。

II. 東京都ユースリーグ草案（第3案）について（別紙参照）

準備委員会での議論を経て2月中旬に作成された草案（第1案）を、第2種委員会のメンバーを含めてさらに議論を重ね、若干の修正を加えながら「第3案」となったもの。

全体の構成は、以下のとおり。

<前文>

準備委員会による東京都の第2種年代のサッカー環境分析がなされ、東京都ユースリーグ創設にいたるこれまでの経緯が述べられている

<理念>

リーグ戦という“方法”よりもむしろ、“理念”や“ビジョン”を共有することが大切。「東京都ユースリーグの理念」は「DUOリーグの理念」をもとに作成された。それは、「スポーツ観の見直し」に他ならない。

<全体構造>

完成年度である2005年度には、「JFAU-18 プリンスリーグ関東」を頂点とし、「東京都1部（8チーム）・2部（8チーム×2ブロック）」、及びその下部には「3部（8チーム×4ブロック）」、「地区」と、底辺に行くに従って近隣エリアに戻っていく衛星型サッカー環境。

<規約>

「1・2部」「3部」「地区」の各レベル別リーグに分けて規約の大枠を作った。上位リーグに行くほど参加資格が厳しくなる。昇格するためには競技力だけでなく、各レベル別リーグで求められる「運営能力」を備えることが必要（例えば指導者資格や審判・グラウンドの確保、参加費など）。

<準備の流れ>

4月末日までに参加意思確認票を提出。それを受けてリーグ編成を具体化する。

5月中旬の準備委員会で議論。

6月中の理事会で承認作業。

7月初旬にユースリーグ加盟クラブ全体会。

9～12月にプレ大会。

同時に実践編としては、現在行われている「PJリーグ」と各地区の「プレリーグ」（DUOリーグもここに含む）を並行しながら、様々な課題を抽出する。

Ⅲ. ディスカッション①（月例会にて）

1. スケジュールの問題

●既存の大会と新設のリーグの間で、日程調整は可能なのか？

●中塚：リーグが整備されれば、既存の大会は「カップ戦」と位置付け、負ければ終わりのノックアウト方式で行うことがまず必要。それでも、全てのチームが1回戦から等しく出てくるやり方では、日程調整は不可能だろう。上位リーグに属するチームが、カップ戦では後から出てくる「スーパーシード」を取り入れれば日程調整は十分可能。すなわち、カップ戦の1～2回戦をやっている間に、1～3部のリーグ戦を消化し、カップ戦の後半に地区リーグを消化するようなスケジュール。ブロック（ジャイアントキリング）で下からずっと勝ちあがっていくチームもあるだろうが、その場合は個別対応すればいい。これまでは、1回戦で負けるようなチームは公式戦が1試合しかできなかつただけでなく、指導者が上位校の公式戦の審判に借り出されるため、大会期間中はろくに練習試合もできないという問題があった。底辺も上位も、そこに関わる人が審判を出し合う、強豪チームも審判を育てて自前で行う感覚が必要。

2. 東京朝鮮高級学校の位置付け

●現在、キムイッチョさんが監督、ホンチャンスさんと私（カンさん）がコーチ、土日にGKコーチが来て指導にあたっている。朝鮮高校のサッカーは、全国規模で2月と9月あたりに駒沢で大会がある。かつてはその大会が最大の目標だったが、高体連の大会にも参加できるようになった今は、他の高校生と同じく、高校選手権出場が大きな目標になっている。ユースリーグがはじまったらぜひ参加したい。

3. 合同チームの参加ーラグビーの例を参考に

●ユースサッカーリーグでは合同チームの参加は意図しているのか？

●中塚：考えている。ただしJFAに加盟登録していることが参加の条件となるだろう

●嶋崎：ラグビーは参加校数確保のためにも、高体連で合同チームを奨励している。まず、5人でも3人でもいいから「参加したい」ところは郵送で意思表示する。それをもとに人数や地域性を考慮して、高体連でどこのチームを組ませるかを協議し、事前に連絡する。例えば9月の全国大会予選なら、

7月の段階でどこのチームと組むかを連絡して「夏休み一緒に練習してくださいね」とする。15人制と並行して10人制のラグビー大会をやっており、合同チームは基本的には後者に出場するが、正月の全国大会予選のみ、15人制にも合同チームが参加する。なるべく同じところ同士が続けてチームを編成できるように配慮しており、例えば関東一高と葛西工業はずっと合同でやっている。東京では平成11年度からやっている。

●中塚：合同チームは所詮「チーム」であって、大会が終わると解散して長続きしない。その場しのぎでしかない。本当は、長続きする「クラブ」を育てるべきだと考えるが、関東一高と葛西工業が長年合同でやっているようだと、そこにはOBも含めた「クラブ」が育つ可能性があるのではないかと。最初は高体連が仕掛けた合同チームの話を引き継ぎ、彼らが独自にクラブ化していく可能性があるのではないかと。

●嶋崎：「三鷹オールカマーズ」のようなクラブチームはあるが、クラブが出られる高校生年代の大会はない。例えば「多摩クラブ」にはシニアもあるし少年の「多摩ラグビースクール」もある。ラグビーの場合、小学生のスクールがさかんで、中学も、学校にラグビー部が少ないこともあって、スクール同士でゲームをやっている。しかし高校生になると学校の部活動に入るため、その年代で切れてしまう。ラグビー協会の登録が「高校」という単位しか認めていないため、地域のスクール活動がそこから先に育たない。ラグビー協会はユース年代のことをほとんど考えていない。「高校生年代は高体連でやってください。お任せしています」というスタンス。ここをうまくつなげようというのが、神戸の平尾氏がやっている「SHIX」。今は、「スクールウォーズ」を見て育った世代が親になり、子供をラグビースクールに通わせている。今がラグビー人口を増やすチャンスかも。

●嶋崎：合同チームでは、チーム名が「合同A」というような名称になる。修士論文で調査した際、生徒の中には「この名前はいや。ちゃんとした名前にしてほしい」という意見があった。「ユニフォームを作ったときにチームとしての一体感を持った」というコメントもあった。クラブのロイヤリティがそのあたりにあると思われる。

4. 運営上の課題—グラウンドの確保と審判

●嶋崎：ラグビーでは現在、新人戦だけリーグ戦をやっている。東京都高体連では、最高140校ぐらい加盟していたのが、一時期、15人制で大会に出場できるチーム数が激減して40校ぐらいになり、そのときに新人戦でリーグ戦を行うようになった。今は60~70校に増えてきているが、これ以上増えるとグラウンドがいっぱいになって運営できなくなるのではと心配している。審判の確保も大きな課題。先ほどの話にあったとおりで、1回戦で負けても、決勝戦までの約2ヶ月間、毎週末私は審判に出かけ、その間生徒たちの練習試合も組めない。サッカーのユースリーグではグラウンドと審判をどうやって確保しようとしているのか。

●中塚：主審は東京協会からの派遣になる。「高体連の試合は高校の先生が吹かねばならない」と思っていたが、実は審判をやりたい人は東京都内に沢山いる。高体連がそういう人を受け入れていなかっただけという見方もできる。ラグビーとは状況が異なるだろうが、サッカーでは長年の審判育成の成果で、やりたい人が結構いる。しかし、派遣審判だとお金がかかる。東京協会の規定に合わせると、主審6000円、副審4000円。これでは運営がパンクする。高校の先生で審判インストラクターの資格を持つ方も多いので、例えばユースリーグの審判をすればインストラクターの指導を受けられるというのを一つのメリットとして審判手当てを減額するなど、いろんな方法を探っている。3部リーグでは副審は帯同で、地区リーグではユース審判に笛を吹かせようになりたい。DUOリーグではそうやって成果を挙げている。審判問題は、お金のことを除けば何とかなる（お金のことは大きな問題だが）。それ以上に問題なのは、グラウンドの問題。学校のグラウンドもサッカーだけが使っているのではない。うまく調整しながらやっていくしかない。都心部のDUOで、8チーム3ブロック規模のリーグができてきているのは「何とかなる」ことの証明だろう。雨が降って流れたゲームでも、「互いに消化しなさい」と言えば、河川敷のグラウンドを取ったり、系列大学のグラウンドを借りたり、自前で探して何とかやっ

ている。

●嶋崎：「自前で探す」ことがポイント。高体連の大会は委員が全て確保してやっている。それは無理

●中塚：たいがい高体連の委員がいてグラウンドがあるところが大会の会場になる。逆に言うと、委員が異動してしまって、グラウンドがあるけど活用されないところもある。学校施設はまだ未開拓。筑波大附属高校の体育館でもそう。グラウンドでサッカーのゲームやっているときにふと体育館を見たら、誰も何もやっていないときがある。使いたい人は沢山いるだろうに、もったいないなあと思う。未開拓のグラウンドはまだあるのではないか。

5. 昇降格・選手の移籍に関して

●3年生が地区リーグに優勝しました。翌年は3部リーグに昇格です。しかしそれが同じレベルにあるとは限らない。メンバーが違うのに入れ替えがなぜ必要なのか？

●中塚：昇降各に際しては、単年度のチーム力ではなく、クラブの力を問いたい。ある一定の力量を持つプレイヤーが毎年入ってくるリクルート力を持っていることも、クラブの運営能力であり、それがトップチームの競技力につながる。総合的な力を持っているところが昇格していくのだろう。大学のリーグもそうになっている。これも一つの文化であって、何年かやっていくと自然淘汰されてくるだろう。複数チームを抱えるビッグクラブは、「1・2部」「3部」「地区」の各レベル別リーグにチームを持つのが理想。リーグ戦を通してレベルが上がったプレイヤーはクラブ内で移籍させて、より高いレベルのチームで経験させるのが良い

●リーグ期間内の移籍は認めるのか？

●中塚：現在検討中。「同一クラブ内の移籍」については、「1試合の期限付き移籍」も含めて認める方向で考えたいが、様々な問題が想定される。

●降格阻止のための移籍もありか？

●中塚：そのあたりが難しい。特別枠選手（オーバーエイジなど）や協会未登録選手（野球部でサッカーの得意な子など）をどうするかも同じ問題。基本的に地区リーグではOKとしたいが、使ったら昇格はできないという縛りは必要か。昇格は考えないで、今のリーグで定期的にゲームができればいいと考えるところはどんどん活用すればいい。逆に、昇格がかかっているチームの対戦相手が、昇格を阻止するためにオーバーエイジを使ってきたらどうするかという話もある。考えればきりが無い。ルールというよりもマナーの問題か。どうやってもそういう問題は出てくるだろう。

●プリンスリーグは毎回チームが入れ替わるのか？

●中塚：関東プリンスリーグは、各都県で最低1チームは残留して1チームは入れ替わるようにしている。例えば東京の4チームがベスト4を占めたとしても、4位のチームは降格する仕組み。何チーム落ちるかによって、東京都リーグとの昇降格数は変わるし、それにともない1部—2部—3部の昇降格数も変わってくる。関東以外の他の地域では、毎回チームが入れ替わることもある。新チームで予選をやって、そのチーム力で翌年のリーグの構成メンバーを決める方法。

●関東では県で必ず一つ残るとするなら、お荷物になるチームが出てくることもあるのではないか？

●中塚：各県で一つは残すというのには、普及の意図がある。高校野球や高校サッカーで各県1代表を認めているのと同じ発想。最低一つは枠があることで、各都県内の競争が活性化する。何らかの努力をしないとレベルは上がらない。良いトレーニングをするだけでなく、良い選手を連れてくることから始まっている。その努力を、各都県で1チームはやってもらおうという意図もあるだろう。

6. 企業の協賛について

●中塚：スポーツに関わる企業としてどういうメリットを感じるか、どういう関わり方が可能か？

●スポンサーとしては、オフィシャル性の高い大会であるということに関してメリットを感じる。東京都ユースサッカーリーグのスポンサーになるためには誰が認めればOKになるのか。プリンスリーグのスポンサーは考慮しなくていいのか？

- 中塚：東京協会が窓口となるはず。各都道府県リーグのスポンサーは、プリンスリーグとは別個に、独自にセールスできるようになっている。
- 大会名に冠をつけることは可能か？
- 中塚：考えとしてはあるが、上から下まで全てに同じスポンサー名がつくというのはあまり考えていない。1・2部のみの冠スポンサーというのはあるだろう。地区リーグは、ローカルスポンサーに当たってもらうのがいいのではないか。
- この話を伺っていると、どこかへ売りに行ったら売れるのではないかと、代理店としては思う。ただ、「うちは東京だけでやりたい」ところもあれば「関東という単位でスポンサードしたい」というところもあるだろう。スポンサーごとにパッケージを考えるといいのではないか。何を売りにいくかということもある。
- ユースリーグは、例えばスポーツ用品産業の活性化につながるだろう。これまであまり試合ができなかった高校生がこれだけできるようになれば、スパイクの消耗も激しくなるだろうし(笑)、一つの学校から複数チーム出るようになるとユニフォームも新たに作るようになる。例えば「リーグ会員証」をつくって、それを持ってスポーツ店に来たら、「安くする」ことはしたくないが、「年間会員売り上げ金額の何%かを協賛する」ようなことができないかと考える。そういうことをリーグの側から提案してもらえると面白いかもしれない。受益者負担で足りない部分の補填という考え方はしたくない。受益者負担は受益者負担できちんとやって運営するのが前提。双方にとってどういうメリットがあるのかをさぐっていききたい。
- 協賛金がどこに使われるのかが気になる。例えば上の方のリーグはプログラムを作るが下の方は作らないというように、注目を浴びる1・2部だけに使われるのでは納得できない。本当は草の根の、底辺の部分のサポートをしたい。上位にいる人たちは今までのシステムでも十分恵まれていた。地区リーグを大切に考えたい。
- 中塚：DUOリーグでは、クラブ加盟費年5000円を管理費として、個人会費年800円をプログラム代とDUOリーグ保険代として、チーム参加費各期20,000円を事業費として徴収している。こうした受益者負担の考え方を、東京都ユースリーグも原則としたい。地区リーグでは1試合3000円×14試合、3部は4000円×14試合、1・2部は5,000円×14試合というのが各チームからの参加費の目安か。その範囲内で運営することが原則である。しかし上の方のリーグに行くほどお金が足りなくなる。地区リーグは、審判は互いにやるし近場でゲームをするから移動費もかからない。しかし上の方は、審判費がかかるし移動にもお金がかかる。会場費もかかるかもしれない。これを受益者負担でというのはもっともな話だが、すると、上の方では金と暇を持った“豊か”な奴しかできないのかということになる。これでは“悪しきアマチュアリズム”と一緒に。底辺もトップレベルの活動をささえているというのがあってはじめて、競技力の高いものの競技生活は成り立つ。このバランスが難しいところだが。
- 裏表あると思う。上の方のチームは今までのシステムで十分できていた。一番変わっていくのは、地区リーグ。これをどうしていくのかが一番問題になってくるし、ここを大切にしていきたい。例えば、地区リーグを運営していく人材が育っていないとするなら、地区リーグに関しては民間に運営を委ね、その運営費を全体の協賛金でまかなうことが可能かもしれない
- ラグビーでは中学生はリーグ戦をやっているが、1試合ぐらいいは芝のグラウンドでやらせてあげようということで、企業が持つグラウンドを開放する形で協賛してもらっている。こういう形の協賛もあるのではないか。

IV. ディスカッション② (説明会・高体連検討会にて)

以下は、4月12日の説明会で出てきた質問・意見、及びその後の高体連ユースリーグ検討委員会が出てきた各地区の意見をまとめて掲載した。

<4月12日：ユースリーグ説明会にて>

1. 昇格・降格に関して

●「1・2部」と「3部」では「同一クラブから複数チームの参加はできない」とあり、「2部から降格の場合、3部に属する同一クラブのチームは地区リーグに降格する」とあるが、「地区から3部に」「3部から2部に」昇格した場合、同一リーグに複数チーム持つこともダメなのか。

●中塚：ダメ。その場合、次年度のチーム編成を各クラブで考えてもらえばいい。つまり、より上位のリーグに残ったチームに、クラブの良い選手を集めてチーム編成するというのを、リーグ期間ごとに行ってもらえばいい（JFAの現行の登録制度では「クラブ」と「チーム」の区分がなく、年度始めに登録したチームしか認められていない。この状況下において、上位リーグに複数チーム出ているとJFAのルールに抵触するのではないかと懸念があったのでこうした。いずれ再検討したい）。

2. 保険への加入について

●規約の中に、「保険への加入」を義務づける一文を入れた方がよいのではないかと。学校教育活動から離れた場合、日本体育・学校健康センターの災害給付金が出ない可能性がある。自分たちで自分たちの身を守る考え方も必要。

3. 付き添いの問題

●「責任能力のある大人の付き添い」をユースリーグ規約では求めており、そこでは学校の教員であるか否かは問うていない。しかしながら、昨今の流れから、高体連加盟校の場合、「顧問の引率」が求められるだろう。

●ABCと3チーム出す場合、それぞれが別の会場でゲームを行う可能性があるが、顧問が3人必要ということか。

●中塚：高体連がそれを求めているのであれば、そうならざるを得ないだろう（しかしながらユースリーグはスポーツのリーグであって、学校のためのリーグではない。それでも学校のグラウンドを当てにしている部分もある。高体連との調整は必要）

<4月25日：高体連サッカー科学研究会兼ユースリーグ検討委員会にて>

1. シーズンに関して

●自分の地区で、「秋始まりにしてもらえないか。4月スタートだとリーグの途中でチームが変わってしまう。9月開始の方が生徒の実態に合っているのではないか」「後期（9～12月）の3年生の扱いをどうするか」が話題になった。

●中塚：準備委員会でもこうした意見は出た。どの学年が出るのかは各クラブで考える問題。高校生である間は参加資格があるとして、多くの可能性を受け入れられるようにしたい

2. リーグ運営に関して

●「運営能力とは何を指すのか」との質問があった。

●中塚：日程調整ができることや、定められた試合に審判を派遣できることなども含まれる。「具体的に」判断する基準が必要かもしれない

●「参加費」をどうするか。同一クラブから1部リーグと地区リーグにチームが出ている場合、それぞれの求める参加費を「受益者負担」として個人に全て委ねるのはどうか

●中塚：各クラブで考える問題

●グラウンドの基準はあるか

●中塚：地区レベルでは、厳密に考えなくていいだろう

3. 地区割りについて

- 「今は高体連の地区で地区リーグをやっているが、いずれは電車の沿線を考慮してやっていく」ということを地区の人たちに話したが、特に意見は出なかった

<感想・意見（中塚義実）>

ユース年代の競技会の見直しは、21世紀の初頭にしておかなくてはならないことだとずっと考えていた。それは、自分自身が学校運動部でプレーしていた頃から漠然と感じていたことであり、修士論文で「日本サッカーのプロ化過程の研究」（1986年度の「スペシャルライセンスプレーヤー制度」導入に関するもの）に取り組んだ頃に具体化し、高校教員になって実際に指導に携わるようになって確信したこともある。「今のままではアカン」と。

「ではどうするか」の結論の一つが、リーグ戦の導入である。

DUOリーグから東京都ユースリーグに至るプロセスを通して、現場と、それを取り巻く空気が変化しているのを常に感じていた。変化に敏感なのはサッカー界であり、よいことをどんどん取り入れ、変えていこうとしている。変化にもっとも鈍感な（あるいは恐れている）のは「学校」であり「～体連」をはじめとする既存の組織である。学校の先生方も、個人的には「変化」を感じて何とかしようと思う人は多いのだが、組織の一員としては鈍感な対応をする。困ったものだ。

ところでそのサッカー界。川淵三郎JFAキャプテンの後押しもあって、「ユース年代にリーグ戦を」の機運がここへきて一気に高まりうれしいのだが、「リーグ戦」という方法だけが一人歩きして、本当に変えなくてはならない本質の部分が置き去りにされてしまうのではないかと心配している。変えなくてはならないのは、①「最後の大会」が終わると「引退」、②「チーム」づくりにばかり熱心で、「クラブ」を育てない、③「選手」と「補欠」ばかりで、自立した「プレーヤー」や「サポーター」を育てない、④「地域」の人材を活用しないで、「施設」を独占…こういった特徴を持つ、いまの“学校スポーツシステム”である。

否定するのではない。見直すのである。我が国における“学校スポーツシステム”（学校体育、学校運動部、学校施設、OB・保護者・教員を含めた学校を取り巻く人材…等）には、いまだ大きな可能性がある。ただ、それを学校教育の中に閉じこめているからおかしなことになるのである。“リーグ戦導入”は、“学校スポーツシステム”を見直すよい機会になるはずである。

今後為すべきことは山ほどある。

1) シーズンの明確化。オフシーズンにはフットサルを

すでに東京都サッカー協会では、2001年度からU-18フットサル大会を2月と8月に開催している。フットサル中心に取り組む高校生の目標となるだけでなく、11人制サッカーに取り組み、リーグに参加する者にとっては、オフのトレーニングとしてフットサルは有効。特に都心部において。

2) サッカーだけでなく他種目でもリーグ戦を

リーグ戦導入は多くのスポーツで有効なはずである。他種目でもサッカーが目指すようなことができれば、ユース年代から複数種目に取り組むマルチスポーツライフも可能である（もちろん従来通り、一つの種目に年中取り組む者がいても全くかまわない）。

3) U-18の次はU-16、U-14と年齢別リーグを（もちろんその上は大人のリーグ）

中学・高校といった教育制度上の分け方でないチーム編成を。そのためには地域をベースとしたクラブの組織化がカギ

4) 学年進行でなく年齢進行をベースとした仕組みを

これによって1～3月生まれが冷遇されてきた環境が少しでも改善されるのではないか（教育界にも一石投じられるのではないか）

5) 多世代・多レベル（ニーズ）・多種目受け入れ型の「クラブ」を

単一クラブから、U-18 リーグにも U-16、U-14 リーグにも複数チーム（レベル・ニーズ別）が参加することで、多世代・多レベル（ニーズ）受け入れ型の「クラブ」が育つはず。もちろん「引退なし」で大人のチームも持つし、女子チームもフットサルチームも持つ。他種目のチームも持てば、多種目型クラブとなる。こうした「クラブ」を、学校を基盤として育てることも可能ではないか（もちろん“クラブ”にはいろんな形があってもよい）。

というように、“リーグ戦導入”をきっかけとして大きな可能性が広がっていく。理念とビジョンを共有できる人たちが、どれだけ汗をかくかがポイントだと思う。その意味で、“志”を同じくするサロン 2002 のメンバーにも力添えをいただければ幸いである。

以上